

「パーソナリティ」
「人格」理論に就いて

津久井佐喜男

序

- 一 ゲンタルト心理学派の人格理論
- 二 社会主義社会に於ける人格理論
- 三 人格理論の批判と其發展的方向

序

人間乃至人格を空間的、質料的に捉えて行こうとする限り、それは何處迄も肉體自體となる。これに反し、時間的、形相的に把えられる時には、それは意識自體となる。

茲に人間が身體自體的な實在と考えられる立論の根據と共に、意識を以て唯一の實在なりとする考え方の根據が見出される。

實在を空間的契機に於て把握することは、單にそれ自身に於て在るものが把えられたに過ぎない。過程自體や意味

「人格」理論に就いて

自體の世界は、空間や時間が夫々獨立して蔭に没し去り、兩者の或る結合だけが存在するという、所謂 Minkowski 的空間のこと、考えられる。かゝる態度を以て臨むならば、空間的なものは何處迄も時間的な、夫自身に於て動くものを包蔵していることとなる。而して斯かる契機を最もよく代表しているものが人間に於ける意識であると考えられる。量子力学に於ける「状態」と稱せられるもの、波動的側面が人間に於ては進化的に意識となつてゐる。この點に於て物質と生物との存在構造の根本は異つてはいない。従つて生物は全て、粒子、波動的な、身體、意識的實在であるということ以上に、その實在に迫ることは出来ない。

人格とは、斯様な實在が環境と相互制約的に、夫自身を維持している姿態であると考えられる。人格が此の様に措定されるとすれば、其の具體的形成はどの様にしてなされるものであろうか。「人^{パーソナリテイ}」概念の中に兎角採り入れられて考慮され易い一切の倫理的價值は、心理学的人間像として捉えようとする限りの「人^{パーソナリテイ}」概念の中には含まれないことを斷つて、その形成過程に就いて考察を進めて行くこととする。

一 ゲンタルト心理學派の人格理論

アリストテレス的概念からガリレオ的概念への推移を内容的に考察するならば、事變の原因を孤立した事物の性質に求めずして、事物とその周圍との關係の中に求める様になつたことである。

個人の環境に於ても、それを先天的に賦與された傾向を生じ易くさせたり、阻止したりするものとは考えない。此を表現する際には、心理学的全事態を包括することによつてのみ、行動を支配する力を理解することが出来るのである。

心理学に於ては、全體事態を人と環境とに分けて、心理学的事變は全て人の状態と同時に環境に依存している。そ

の何れに重み、が置かれるかは、その都度の事態であり、兩者に依存する事實には變りはないとされる。

全ての心理学的事變に應ずる法則を次の様な函數方程式によつて捉えようとする。

即ち $B = f(P, E)$

但し(B)は行動を、(P)は個體的條件を、(E)は環境的條件を示す記號とする。

而して一定時に於ける個人の行動を規定する事實の總體を示す場合、これを心理学的生活空間と稱する。

但し個體的條件と環境的條件とは、實驗的處理に於ては、獨立變數として變化せしめられるのであるが、實際の働きの於ては、夫々獨立ではなく、(P)の變化は(E)の變化を結果し、(E)の變化は(P)の變化を結果する處の相互依存的關係にある。かゝる關係にある(P)と(E)とは、従つて獨立の實體ではなく、兩者により、同時に規定される「力の場」の決定因子であり、(P)又は(E)を組織的に變化することによつて、(B)の變化を明かにし、乃至は(B)の變化を媒介として(P)若くは(E)の役割を體系化しようとするものである。勿論後者の場合、正常な心理学的生活空間に於ける、(B)に關する法則が判明になつていなければならぬことは勿論である。

科学理論の發展段階として、その量、範圍、性格に就いて、物理学に於けるアリストテレス的概念から、ガリレオ的概念への推移に對應する、現代心理学の發達段階の主要特性は、夫々の段階を「思辨的」、「記述的」、「構成的」として左表の様に簡易的圖式化が試みられる。

(Lewin K.: "Principles of topological psychology" 1936)

表 I

心理学の發展段階に應ずる概念及び方法の性格

「人格」理論に就いて

時 期	目 的	概念構成 の一般的性格	歴史的及 體系的問題	體系の型
I	思辨的（アリストテレス的） 事物の本質と全ての事實成立の背後にある原因を發見すること。	心理學的概念が、心理學的でない概念から區別されていない。 心理學を、單なる法則をもつ獨立的な諸々の分野に分ける。	事實成立の問題と質の問題が區別されていない。 歴史的起源と原因が別確に區別されていない。	全てを包括する様な體系が、唯一つの概念或は二三の相互に關聯のない論理的概念から導き出される。
II	記述的 出来る限り多くの事實を集めて、それを正確に記述すること。	理論に對し敵對的		抽象による記述的分類。
III	構成的（ガリレオ的） 法則を發見すること。 個別の場合を豫測すること。	心理學的でない概念の排除。 心理學的諸現象は、同一の法則體系により支配される一つの世界として取扱はれる。	事實成立の問題と質の問題が區別される。 歴史的起源と原因が明確に區別される。	構成的。體系は、相互に關係のある一群の概念に基礎をもち、對立する概念間には、漸次的な推移が可能である。

表II

法則性と力学的概念

時期	法則性の性質	特殊法則の 證明法	概念構成の論 理的性質
I	<p>法則 規則。個別的な場合は法則的でない。 法則性は唯事實成立の規則性のある處にだけ存在する。</p>	<p>個別的。差異を無視して、類似の事變が生起する頻度を示す。頻度が大きで、似ていれば似ている程、規則は確かなものとなる。 // 例外のあることが規則のある證據</p>	<p>差異の捨象による分類。(統計的平均)事物の概念が優勢。</p>
II			<p>現象型による分類。</p>
III	<p>法則 規則。唯一回の事變も含めて、全ゆる事變が法則的である。事變が法則的であることの經驗的確認は必要でない。</p>	<p>個別的な純粹な場合を考究する。體系的條件分析法。 個別特殊からは抽象しない。 證明の價値は、場合の純粹性に依存するのであり、頻度に依存しない。 實驗 純粹な種々の場合を慎重に作り出すこと。</p>	<p>構成による概念形成(分類に反對)。 發生的定義。事變の概念が優勢。 函數的條件發生的概念。</p>

「人格」理論に就いて

力 學

原因は、方向付けられた要因（傾向）である。事物自體の本質が行動の原因である。行動は過去乃至未來によつて規定される。

原因は方向付けられた要因である。數個の事實間の關係だけが、事變の原因たりうる。事變は全て同時的事態の總體に依存している。

精神的行動の個體的條件の總體を人格 (Personality) と稱し、心理学上、素質と習慣をこの中に含ましめるが、前述の如く、倫理的價值は全く排除される。而して通例、人格の心理学的側面として、知能 Intelligence 性格 Character 氣質 Temperament が擧げられる。これらは統一的人格の異なる側面として、相互關聯的であり分離獨立して取扱はれることもあり得ず、且つ素質と經驗の合體として、其の成熟位相によつて必ずしも一様性を欠き、複雑微妙な構成をなすものとされる。特に性格と氣質の區分は分明ではないが、性格は人格の意欲的構成契機をなすものとして、欲求體系の基底をなし、欲求發動の強度、活潑性、及び欲求間の平衡に規定される。然かのみならず、身體的、精神的内部機制や、目的達成に必要な身體的、精神的手段の實現可能性にも依存する。前者の生理的基礎をなすものは、自律神経系に支配される内臟的調節作用と、これに連なる感情的感受性とである。

此に對し、後者の夫れは、感覺運動神経系に支配される處の運動體制、及び知識體制である。この人格の感情的契機を氣質と稱し、手段的機能を知能と稱する。

知能は先行經驗の上に立つて、新事態に適應する能力として、過去經驗なる知識、習慣に規定されると共に、現前事態の要請に規定されることとなる。勿論能力とは、何らの實體概念の謂いではなく、可變的可能性として措定された處の機能的概念であることは斷る迄もない。

Levin K.の見解を中心として、個體的條件、環境的條件に關するゲンタルト心理学派の見解を尙暫くたどつて見よう。前述の如く個體的條件に對應するものとしての環境的條件は、兩者の緊密な相關關係的位置附けから、共に一體となつて、生物学的「力の場」を構成していると考えられ、物理学に於ける「力の場」を空間と稱するのと同様な意味合いで、それを心理学的生活空間と稱することは前述した通りである。

従つて環境的條件の基本的なものは、生活的環境條件であるが、この條件に個體が反應する時は、個體內に或種の變化を惹起する。然し乍ら、この變化も、個體の狀態的性質の變化として見られた場合には、個體的條件と考えられ、それが個體の行動に影響を及ぼすと考えられ、ば、環境的條件と考えられる。即ち主體と環境の位置關係は、全く相對的なものであり、行動の條件を分析する場合の二つの極概念に過ぎない。

斯くして行動成立の條件としては、個體に於ける欲求體系と、環境の擔う要請的性格の力学的場に於ける行動價乃至誘意性 (Valence) の概念の中に解消される。即ち誘意性は、相反方向性を有ち、欲求の昂進がなければ成立しないと同時に、其時の事態の中に欲求的緊張を解消せしめる様な可能性が含まれない限り成り立たない。可能性には種々な程度が考えられ、不可能な事態は何らの可能性を有たず、現實の欲求が充足される可能性の低い場合には、現實度の低い次元に於ける欲求解消の方向を求めることとなる。

更に欲求實現手段として、感覺器官、運動器官、知識體制などが考慮されるが、欲求と環境とが相對的なものである限り、媒介手段も亦不變の實體性を有ち得ないこととなる。即ち、手段は新しい課題狀況に應じて新しく創造されなくてはならず、斯かる創造の結果は傾性として保持され、既成手段の體系化現象を起す。既成手段は、現實的手段の殘滓であり、新手段構成の基礎となるに過ぎない。従つて、斯かる基礎の上に行はれる行動は、本來の意味の手段であると考えられる。手段はこれを生理的 (生命的) 段階にあるものと、心理的 (社会的、文化的、精神的) 段階に

あるものに分けられよう。而して、前者の段階に於て作用する認識が感受性であり、其の行動結果は有機體中に、感覺器官を分化發達せしめ、其の遂行活動は身體運動として現象化される。この段階に於ける認識と行動の關係は、直接的、一義的である。此に對し後者の段階に於ける手段は、間接的、多義的であり、意識的、選擇的であると見做され、その自由選擇的であるということが、即ち自由の意識を有つていないことに歸着せしめられる。然し乍らこのことは、必ずしも生理的段階に於ける手段の間接性、選擇性の全く認められ得ないことを意味しない。

他人の意識は、直接それを知ることが出來ず、唯彼等の示す處の行動を通して想定するものであるとすれば、人間と同じ様な行動を示すと思はれる動物にも意識が働いていると想定し得よう。然し乍ら意識の生理的基礎に就いて、我々の知識は貧困であり、大脳皮質部の感覺的中樞の活動を必要とすると思はれるが、中樞の活動は常に必ずしも意識を隨伴しない。意識を生ずるためには、我々は心的内容を意識しようとする特殊な態度を採らなければならぬ。こゝに意識の客觀化の機能が見られる。

精神の原初的段階に於ては、生活空間としての個體と環境とは統一體を成して居り、自我、他我の意識も未分化である。自我は欲求障礙に於て成立し、更に判明な形態として、他我の意欲とのコンフリクトに於て自覺的段階に到達し得る。そうして、斯ういう障礙が客觀化される處に意識の芽生えが讀み取れるのである。即ち原初的生命段階にあつては、主客未分化のカーオスであり、其處に凝離現象が起つても、多くはカーオスの中に埋没せしめられる。これを喰ひ止めるものが意識そのものであり、そこに知覺を生じ、感情が生れ、知識體制を形成し、情念となり、一般精神生活が繰り展げられて行くとされる。

即ち意識の機能は、生命的流動に操作可能な有形の姿態を與えるものであり、これに、言語機能、科学的記號が參畫することに於て、手段は最高度に高められて行く。

以上見て來た様に、凡ての知覺、行動は、經驗的、學習的にばかりでなく、内在目的的、意欲的に營まれ、而もそれが態度として社会的、歴史的なものを擔つてをり、客觀的に、同一刺戟がその機能的價値を主體毎に變え、主體毎に独自の生活空間を構成し、主體毎に異つた處の符號乃至強さの誘意性を有つのである。従つて行動は、意味が夫々の必然的メカニズムによつて實現されるものである。斯様にして、體驗されるのは全體であつて、部分はより高度の心性の働きによつてのみ、初めて分析抽出されるものであり、直接經驗としての意識に與えられる順序は、實在自體の順序に代位されて了うのである。現象的に先行する處の「全體」の「機能的實在性」の過重視によつて、「部分」は實在性を消去せしめられて、抽象的な、人爲的構成體となつて了う。従つてゲンタルト学派に於いて科学方法論上占める處の「全體」の優位性は、直接經驗を緒口として、客觀世界の構造分析に發展することなく、其の現象分析、條件分析は、「條件」の客觀的實在性が消失する爲に現象の場の類型の符號的記述に終り、符號の抽象的形式の非特殊性が、客觀性であるかの如き錯覺に陥らざるを得ない。即ち部分の辨證法的對立物としての全體を喪失して、抽象された觀念的全體感に依據することにより、具體的な基底部である部分までも消去して了う傾向性は充分批判の餘地を残すものである。

ゲンタルト学派の見解に立つコフカ(K. Koffka)によれば、主體の行動を規定する處の環境は、これを主觀的なその人間に認知される限りに於ける「見え」の環境(「行動環境」(Behavioral environment))と、客觀的な、「見え」に關はらない環境(「地理的環境」(Geographical environment))との二種に分けて構想される。而して有機體は「行動環境」の中に於て行動し乍ら、「地理的環境」に適應して行くものであるとする見解が採られる。

茲に於て看落してならない點は、主體の實踐に媒介される客觀界の意識に於ける反映の深まり、ということの問題化されていぬ點である。客觀的體驗は、物理的世界と、その意識された限りに於ける部位と、大脳皮質部に於ける生

理学的過程の假定との間に同質、類同、近接等の *Gestalt*^{ゲスタルト} が平行的に存在してをり、夫等が各々「よき形態」——均衡理論による安定化——へと變容して行くものであるとされる。これを記述するのが機能概念であり、現象の條件分析的考察により、體驗の基底の部位は外界に機能的に實在すると保證される。茲にゲスタルト学派の生理的、物理的、心理的、社会的なもの、同一原理による平板化傾向が認められるのである。所謂「ゲスタルト」は、記述概念、機能概念の融合の上に立つ媒介概念であり、それは眞の意味に於ける法則でありうるかどうかの批判的餘地も亦残されるのである。

二 社會主義社會に於ける人格理論

「行動」、「人格」、「環境」、「環境」を前述の如く捉えて行こうとする、ゲスタルト心理学派に屬する学者たちは、歐米諸國に於て主として動物、(Köhler W.) 兒童、(Lewin K. Koffka K.) 未開民族などに於ける實驗を通して確立された基礎理論の社会的實踐の場を教育に求め、教育の場に於ける理論の再編制を展開して行つたのである。最近に於けるアメリカの教育心理学の隆盛と、理論的基底にその全貌を看取し得るのである。

心理学に於ける「人格」「環境」「行動」の認識論は、人間の具體的行動様式を方向付けるものとして、それが教育的視角から最も効果的に採り擧げられる傾向は、学の基本的性格として決して排撃されはしない。

社會主義社會にあつては、斯かる認識論的基盤から、多くの行動主義心理学者、ゲスタルト心理学者たちが「児童学」のコースをたどつて行つたのである。前者に屬するものとして、ザルキン^{Заркин, А.Е.}、ブロンスキー

Бронский, И.И.、モロシヤヴィ^{Морозовский, С.С.}、後者に屬するものとして、ヴァイトスキー^{Вайтский, Л.С.}、などが

る。

児童学の立場は要約してみるならば「児童は環境の産物である。環境が児童の身體の成長や、能力や、傾向を形成する。児童は、彼に細かな適應を要求する所の自然環境というよりもむしろ、社会環境の成果である。……だから、われわれが児童を研究する場合には、彼の状態や彼の行動をそれ自體として、つまり、孤立させてとらえてはならない。それらの状態や行動をよび起した諸條件との生きた直接的な關聯に於て捉え、それらのものゝ相互依存性を明らかにしなければならぬ。……児童との完全な接近の仕方は、彼の行狀を統一的な相互制約的な一聯の行動と見、それ／＼の行動を彼の中に現はれている全ての習慣の密接な結合と考えるという行き方である。

児童を研究するには、何によりも先ず四圍の環境を研究しなければならぬ。児童の現はす現象を、根丈けでなく土までつけたまゝで引き出さなくてはならない。」(モロジヤヴィ著「学齡前教育者養成の新しい道」(1923)という児童を環境の産物と見る立場に於て集約的に表現されるであろう。

茲に於てモロジヤヴィは「教育施設の内外の環境(社会的階級的、生産的勞働的、日常生活的な)傾向を研究し、亦環境の構造(どの様に貧富であるか、複雑であるか、組織されているか、どの様な動態を示しているか、自然環境はどうであるか、など)を研究しなければならぬ。」斯様な圖式的材料の蒐集の上で「一定の環境形態と児童の精神的身體的機能との間に恒常的な關係を樹立し、各種の社会集團の児童の具體的な類型を見出し、児童施設と児童の作業との環境を、教育的觀點から見て、最も合目的である様に組織し、教育の新しい、自分たちの目的にかなつた技術を探り當てること」をしなければならぬと説くのである。即ち環境を研究すれば、そこから直接的に教育の方法と體系を抜き出すことが出來ると主張する。斯かる主張は児童の行動を環境の刺激に對する反應と見、環境によつて決定されるとする考え方であり、全體として児童の行動も、個々の行爲も、一聯の外的刺激に對する生活體の反應

であり、それは環境によつて決定されているという「萬能なる社会環境の物神化」である。

こういう考え方は其の後、「兒童の運命は、生物学的な社会的要因により、遺傳と或種の不變の環境との影響によつて、宿命論的に條件づけられているものである」(一九三六年「兒童学的偏向に就いて」)として、その偏向を指摘され、兒童学的構想は其理論と實踐が反科学的、反唯物辨證法的命題に立脚しているものとして排撃される経過をたどるのである。

コルバノフスキイ Корбановский, В.И. 「ソヴェト心理学の當面の問題」 Рубинштейн Рубинштейн, С.П. 「心理学のプログラムに就いて」によると、心理学者は何によりも先ず、反映論の光に照らしてみられた心理に就いての理論を與え、辨證法的唯物論の基礎の上に立つて、精神物理的な諸問題を解決しなければならないという見解が採られ、心理学の對象に就いての基本命題として次の様な見解に到達する。

一、精神は高度に組織された物質である。

二、精神が高度に組織された物質である以上、それは發達の産物である。

辨證法的方法論を基礎として樹てられる心理学は、心理現象をその發達の合則性に於て研究する。方法論的には發生学的心理学である。

三、社会的實踐の基礎の上に立つて、人間の意識の歴史的發達の特性を強調しなければならない。この基礎の上に立つて、意識と行動との統一——同一ではない——が示されなければならないし、亦その様にして精神の客觀的認識の道が解明されなければならない。

即ち心理学的合則性を發達の相に於て捉えていることである。そうして發達の理解のされ方は、次のレーニンの「辨證法の問題に寄せて」の章句中に讀み取られる。「發展は對立の鬭争である。二つの根本的な(又は二つの可能

な？又は二つの歴史上に見られる？）發展（進化）觀は、減少及び増大としての、反覆としての發展と、對立の統一（相互に排除し合う對立えの二者の分裂とこの對立間の交互作用）とである。

第一の運動觀では、自己運動、その起動力、この源泉、この動因が陰にひつこむ。（又は、この源泉が外へ移される——神、主觀等々）。第二の運動觀では、主な注意が正に、自己運動の源泉の認識に向けられる。

第一の見方は、死んだ、貧弱な、ひからびたものであり、第二の見方は生きてゐる。第二のものゝみが一切の存在するものゝ自己運動を握む鍵を與える。そのみが、飛躍、漸次性の中斷、對立えの轉化、古きものゝ絶滅と新しきものゝ發生とを理解する鍵を與える。對立の統一（合致、同一性、合成）は、條件的、一時的、相對的だ。相互に排除し合う對立の鬭争は、絶對的だ——發展、運動が絶對的である様に。「レーニン「哲学ノート」一九三七年、白楊社版）

そうして精神の發達が屢々進化論的に考えられ、低い形態から高い形態へと相續乃至繼承されるものと考えられている。それは漸進的發達であり、飛躍や質的新生はないものであると考えられている。こういう考え方は、科學的研究の方法乃至方法論にも一定の影響を與えるものである。万事が低い形態のものゝ研究えとひきずり降ろされ、この低いものゝ合則性が高い形態のものへと機械的に移されることになるのである。

精神發達の形而上學的立場は、精神を、自己充足的な實體として、又は客觀界に依存しない處の超越的認識不可能な存在と見做すところから生れて來る。精神發達の基礎の中に内在的、閉ざされた法則があると考えられている。然し乍ら心理現象は、獨特の組織を有する物質の特性であり、客觀的實在の主觀的反映なのである。精神の發達は主觀と客觀との鬭争の過程、主觀客觀の相互侵透の過程に於て行はれる。精神の物質的基底——神經系統と感覺器官——の自然的發達は、客觀的實在の反映が發展して行く夫々の段階と相應する處の不可避的物質的前提である。この前提

が備はつた場合に、現實に對する直接的な知覺と、その解釋が可能となる。而してこれらの要目は、實踐の過程に於て、主體の内的所有となり、個體の自然を變革させることとなる。コルバノフスキイは、「心理学にあつて今日迄、基本問題であるべき筈の人格という問題が見失はれていた。今日は、この人格が心理学的研究の中心問題とならねばならない段階である。然し乍ら、個々の心理的機能や人間の行動の個々の側面の研究をしりぞけるものではない。たゞ個々の機能的側面の研究は、機能的複合を豫測して行はれがちであるが、そうではなくて、夫々の部分を構成しているものゝ總和より以上のものであるところの人格の辨證法的綜合を豫想すべきである。それ丈けでなくて、心理的機能そのものが新しいやり方で、即ち人格の相に於て研究されなくてはならない。」と述べている。(前掲論文)

又、ルビンシュテインも

「人格の問題は心理学にとつて基本的重要性をもつている。資本主義社会は人格の價値を無視するものであるが、それに對應して本質的には、人格の問題が見失はれている。觀念論的心理学者は、意識を現實の人格から切り離して考へている。人格を反應の單純な複合に歸着せしめてゐる。元々勞働者を機械の附屬品と見る考え方の反映なのである。」「人格を深層にひそむ原始的なものが、それにひきづり落した。人格の理論を動物学的「アンソロポロギー」にすりかえて了つた。」「全體としての人格は心理学的構造ではない。心理学は人格の心理的特性、人格の意識を研究するものである。われ／＼は、それを人格の諸問題の一般的取扱ひ方の解明から始めなければならぬが、その目的は、人格が心理学の面に於てどの様に現はれるかということを、その基本的特徴に於て示すことである。これを基礎として、人格と意識との間の、意識と心理学的機能との間の、相互關係を先ず明かにした後、意識の機能分析に移らなければならぬ。」

「意識を機能の綜和とか、機能の束と見る考え方に反對する。全體的人格を研究せねばならないが、分析なくして

は全體も綜合もあり得ないことは明かである。分析は心理学的研究の不可避的な部分である。機能は意識の分枝であり、分化であつて、現實に存在している。勿論、それらを機械論的に相互に切り離して、意識を機能の聚合體と考へてはならない。だが機能的分析は必要である。たゞ機能的分析が、意識をその全ての側面の統一に於て、また、様々な心理的過程の多様な力動相に於て具體的に研究する道を閉ざすことのない様にするのが問題である。夫々の機能は人格の機能、統一としての意識の機能であることを示さなければならぬ。たとえば、知覚は一個の機能であるとする丈けではいけない。多様性を備えた知覚する意識として取り扱はれなければならぬ。この知覚する意識は具體的人格の意識であつて、教育の過程の中に於ける一定の條件の下で形成されてゆくものである。」(何れも前掲論文)

斯かる児童学の有つ偏向性への批判は、現在に於てもゲー・エス・コステューク Kostjuk, I. C. 「児童の人格形成の實際的諸問題」(1949) エフ・エフ・コロレフ Korolev, E. F. 「社会主義的工業化の時期と全面的集團經營化の初期とに於けるソヴェト学校」(1950) ベー・ゲー・アナニエフ「ソヴェト心理学の基本的諸問題」(1950) などの諸論文に於て読み取ることが出来、何れもコルバノフスキイ並にルビンシュテインの理論の發展的展開が社会主義經濟建設の發展段階に相應した相に於て首肯されるのである。

三 人格理論の批判と其發展的方向

具體的人格形成の問題を圍つて、科学的認識論の展開を「ゲシタルト」学派並に社会主義社会に於ける人格理論に就いて概観して來た處を茲に改めて要約、批判してみることにする。

ゲシタルト心理学派の見解を要約してみると次の様になるう。

一、所與は全體的過程であり、その下に全體に規定された下位全體としての部分を含む「分節的全體」である。

「人格」理論に就いて

二、この全體は直接知覺されうる。そうして發生的順序として全體が部分に優先する。

三、方法論的に、現象分析から條件分析に進む處の自然科学と本質的に差異はない。

四、質と量、有機と無機、諒解と説明に融合される。科学の進歩もこの様な成全分節の力動的過程として理解され、認識論、科学論は全てゲシクルト原理によつて融合される可き下位全體、過程の一断面としての位置に組み込まれる。

要するに「ゲシクルト」と稱せられる便宜的媒介概念によつて、全ゆる矛盾は融合されて了うのである。西田哲学に於ける「絶對矛盾的自己同一」と一般であろう。即ち完全な説明は完全な理解と一致し、量は質としてのみ具體化され、秩序は意味をもつことによつて始めて實現するという一般的解決が齎らされるのである。

「ゲシクルト」は、よりよく分節した統體を向う傾向があるとなし、程度の差として無機界から人間社会の諸法則迄が統一的に把握される。而もこのゲシクルト全體は其部分をなす要素から構成されるものではない。従つて抽象的全體は具體的部分を離れて了い、部分と全體との辨證法的關係は看過され、「全體の先行」といはれるものは、現象的な、意識に與えられる時間の上での先行であると同時に、存在としてのそれでもあり、方法論的且つ論理的先行ですらあるものとされ、現象主義から相對主義への道が開かれる。

第一節に論述した Lewin K. の「元型」(Genotypus) 探策の際探られる「顯型」(Phänotypus) の現象分析は、「元型」の數學的符號による記述に轉化されて了い、相對主義的、記述主義的偏向に陥入つて了う。(Principles of Topological Psychology. 1936. The Conceptual Representation And The Measurement of Psychological Forces. 1938. Lewin K.) 又 Köhler W. のイソモルフィズムは心的事實に對應する生理的過程を、一對一的對應でなく、molar に考えることにより、矛盾の克服に努めたが、心理的ゲシクルトに對應する生理的ゲシクルトを假定する

方法論が展開され、解和劑「ゲシュタルト」による意識と物の混淆錯綜化を來し、生理的過程なるものも決して、物としての肉體自體の機能ではないのである。

ゲシュタルト心理学派に於ける客觀界が、機能的實在性により保證されている所は、畢竟觀念的自己と同格であり此の客觀界と自己はゲシュタルトを通じて媒介統一され、所與一般は分節的全體の再組織過程として、主、客を包んで展開してゆくのである。即ちこゝには、眞の對立も見られなければ、従つて眞の發展もなく、平衡理論の上に立つた反覆、増減現象に過ぎない。ダイナミックであることは即ち函數的相對主義の域を超えられない。

ゲシュタルト学派の稱える「全體」は、現實的な「部分」の辨證法的對極としてのみ把握しうるものであり、機能概念と記述概念の對立も、主客の實踐的對決による意識の客體反映の發達過程としてのみ正しい解決に到達し得るし、亦 *being* を直接經驗として現象的に捉えるのではなく、生産關係の具體的擔い手として、自然的環境と社会的環境との動的統一過程に働く階級的生活體として捉えようとする態度に於て始めて人間の「全體」具體像に迫ることが許されるし、同時に可能なことゝ云い得よう。

次に毛澤東の「實踐論」を中心に認識論の發展經過をたどつてみよう。

「低い段階では、認識は感性的なものとして現はれ、高い段階では、認識は論理的なものとして現はれるが、そのどちらの段階も、皆統一された認識過程のうちの一つの段階であると考えらる。感性と理性という二つのものゝ性質は異なるが、また相互に切り離されたものではなく、それらは實踐に基いて統一されているのである。われわれの實踐はつぎのことを證明している。つまり感覺されたものは直に理解されるものではなく、理解されたものだけが、より深く感覺されることになるということである。感覺はたゞ現象の問題を解決するだけであり、理論だけが本質の問題を解決するのである。これらの問題は、實踐を離れては一寸も解決することは出來ないのである。何かのものを認識し

ようとするものにとつては、その物事と接觸することつまり物事の環境の中で生活すること（そこで實踐すること）以外には、他にどんな解決方法もないのである。」

「理性的認識は感性的認識に依存している。そして感性的認識は理性的認識に發展してゆくはずのものである。感情から理性に進む辨證法的唯物論の認識運動は小さな認識過程についても、その通りに發展するし、大きな認識過程についても、その通りに發展するのである。」「最も重要な問題は、客觀的世界の法則性を理解することによつて、世界を説明することが出来る點にあるのではなくて、この客觀的法則性の認識を適用することによつて、能動的に世界を改造する點にある。」

「認識は實踐にはじまり、實踐を通じて理論的認識に到達し、さらに再び實踐にかえつてゆかなければならない。」
「實踐は眞理の基準であるといはれ、生活、實踐の見地は認識論の第一の、そして、根本の見地でなければならぬ。」
「實踐を通じて眞理を發見すること、また實踐を通じて眞理の正しさを立證し、眞理を發展させること、感情的認識から能動的に、理性的認識にまで發展させて行くこと、また理性的認識に基いて能動的に革命的實踐を指導して、主觀的世界と客觀的世界とを改造すること、實踐、認識、再實踐、再認識という形で、この循環往復を無窮に繰り返してゆくこと、しかも、實踐と認識が循環すること、その内容が一段と高度のものに進んでゆくこと、これがつまり辨證法的唯物論の認識論の全部であり、これがつまり辨證法的唯物論の知識と行動の統一觀である。」

また「認識の眞の任務は感覺を得て思惟に到達し、次第に客觀的事物の内的諸矛盾の理解、その法則性の理解、一つの過程と他の過程との間の内部的諸連關の理解に到達すること、即ち論理的認識に到達することにある。」
「どの運動形態にも、その内部にはみなそれ自身の特殊な矛盾が含まれている。この特殊な矛盾が一つの事物を他の事物から區別する特殊な本質を構成している。あらゆる物質の運動形態のもつている特殊な本質は、それ自身の特殊な矛盾

によつて規定されているのである。」

以上は毛澤東「實踐論」(認識と實踐との關係—知識と行動との關係—についで)1937年を中心に併せて「矛盾論」1937年の一部の抜萃であるが、我々はこの平易な論旨の展開の中に認識の發展に關する辨證法的唯物論の一層の前進を讀みとるのである。毛澤東の「實踐論」、「矛盾論」を通すことなしに、辨證法的唯物論を十分に理解することが出来ない迄に、平易にして而も高度の認識論の展開を看取し得るし、これらの表現の中に、私の論述し來つた處の「人格理論に關する心理学的見解」の一頂點を見出すことが出來よう。要するに人格の形成は、主體の環境に順應する態度過程に於ては、主體の客觀的法則性の認識を適用することによる、環境への能動的働きかけによつて、人間を中心に環境を變革適應せしめる過程——實踐——に於て形成されるものであり、意識の反芻による力学的均衡理論の説明乃至記述によつては、發達の具體的諸相を包む人格形成の眞の理論的把握には到達し得ないのである。

附記

本邦心理学会に於ける、ゲンタルト心理学の立場に立つ學說の展開、並にその實驗心理学的立證は近時一般化されて來てをるが、此學說に對する前段階的批判はあるにせよ、發展的批判は殆んど見當らない。乾氏の一論文を見るのみである。

時間の餘裕のないまま、舊稿を補足するの域を出なかつたことを残念に思うが、幾多の重要な問題を孕んでいるので、何れの機会により充分検討の上、より良きものを生み出したいと念じている。

(一九五二・一二・七)

参考文献

1. Lewin K. "Principles of topological Psychology", 1936

「人格」理論に就いて

2. Lewin K. "The Conceptual Representation And The Measurement of Psychological Forces" 1938
3. Lewin K. "Field Theory in Social Science" 1951
4. Koffka K. "principles of Gestalt Psychology" 1935
5. Köhler W. "Dynamics in Psychology" 1939
6. Köhler W. "Intelligence in Apes" 1925 宮孝一譯「類人猿の智慧試験」
7. Köhler W. "Gestalt Psychology" 1929 佐久間鼎譯「ゲシュタルト心理學」
8. Josef Dietzgen "Das Wesen der Menschlichen Kopfarbeit" 1869 小松輝郎譯「人間の頭腦活動の本質」
9. レーニン「哲學ノート」白揚社版
10. レーニン「唯物論と經驗批判論」上、中、岩波文庫版
11. エンゲルス「フオイエルバツハ論」岩波文庫版
12. エンゲルス「反デューリツグ論」 "
13. エンスタツチエノフ監修「辯證法的唯物論と史的唯物論」ソヴェト研究者協會譯
14. 毛澤東「實踐論」毛澤東選集第2卷
15. 毛澤東「矛盾論」 " 第3卷
16. 毛澤東編「思想方法論」
17. エンスタツチエノフ監修「史的唯物論」上、下、ソヴェト研究者協會譯
18. 矢川徳光著「ソヴェト教育學の展開」